

「レクリエーション」イメージの変遷について  
 - その経年的比較 -

○ 高橋 伸 (国際基督教大学)、高橋和敏 (余暇問題研究所)

キーワード：レクリエーション、イメージ、自由連想法

I. はじめに

レクリエーションという言葉がわが国において一般に使用され始めたのは、第二次世界大戦終了直後の1940年から1941年にかけてであるといわれている。それ以来レクリエーションは人間生活にとって必要不可欠なものといわれているものの、依然としてわが国の社会システムにはなっていない。その理由はさまざまであろうが、その一つとして、レクリエーションという言葉が、現在においても、ある特定活動の種目のみを意味して使用されたり、さまざまな解釈がなされていることによるものではないかと思われる。

元来、人はある事象に抱くイメージがその人の行動に大きな影響を与えるという説に従って、その理由発見は、イメージ測定が鍵になるのではないかと考えた。

かつて高橋(和)が、1968年に自由連想法によるレクリエーションイメージの測定を国際基督教大学新入生男女を対象にして実施した研究を継続して、高橋(伸)が1986年および1999年に実施した調査を比較検討するに至った。

なぜ自由連想法によるイメージ測定に固執するのか、それは、素朴で生の姿を彷彿させ、実感的にイメージを把握できるからである。

II. 研究の目的

本研究の目的は、1968年度、1986年度および1999年度入学生におけるレクリエーションのイメージの一般的傾向を比較することである。

III. 研究の方法

1. 対象

各年度の対象者の性別と人数は、表1に示す通りである。

表1 対象者数

	'68年 (%)	'86年 (%)	'99年 (%)
男子	125 (52.5)	146 (37.7)	122 (34.0)
女子	113 (47.5)	191 (62.3)	237 (66.0)
合計	238	337	359

2. 方法

自由連想法 (Word Association Test) を使用した。

1) 刺激語 : 「レクリエーション」

2) 回答方法 : 時間は2分で、反応語は名詞か形容詞に限定する。

3) 管理方式 : 教室にて一斉に実施した。

3. 分析

高橋(和)が、Rapaport. Dの反応内容分類を基本に作成した反応語5分類を用いた。第一反応語は、直感的イメージを表すときに有意であるが、一般的傾向を把握するには、第一反応語から第三反応語までを含めた結果が、より効果的であることから、今回は、後者を用いた。(表2参照)

#### IV. 結果と考察

まず、分類による比較結果は、右図1の通りである。感情反応は、1968年度から1986年度かけて、男女ともほぼ半減したが、1999年度には回復している。

レクリエーションについて、解釈する叙述反応は、年度とともに顕著な増加傾向を示している。これは1999年度において、1968年度と比べると男子は約3倍、女子では約2倍となっている。

具体的な活動イメージを示す種目反応は、全体的に多いが、特に1986年は特出している。

男女を比較しても大差のない結果となった。

年度別変遷は、多少あるものの総じて叙述反応と種目反応が優位となった。これは実際経験が少なく、活動種目のみが印象深かった経験を物語っているといえよう。

#### V. まとめと今後の課題

なお、各年度ごとに、具体的な反応語の検討を実施したが、第一位は全て「楽しい」となっていたのは印象的であった。また、「遊び」と反応したものが、年度ごとに増加していることも見逃せない。最近になって変化しているのではないかと推測できる。しかし、楽しいや遊びのイメージがあっても、それが実践につながらないかと懸念されるところである。

今後は、今回の結果を踏まえ、レクリエーションに対する解釈が正しく認識されているかどうか、明確にしたい。

表2、反応語の5分類

感情反応：	楽しみ、愉快、明るいなど、感情を表わしたもの
叙述反応：	休養、健康、遊びなど、説明的なもの
種目反応：	キャンプ、卓球など活動種目をあげたもの
共在反応：	山、海、椅子、など活動と共にあるもの
印象反応：	笑い、和、輪、など、活動に伴う印象を表したものの

図1、5分類 男子 第1~3反応語

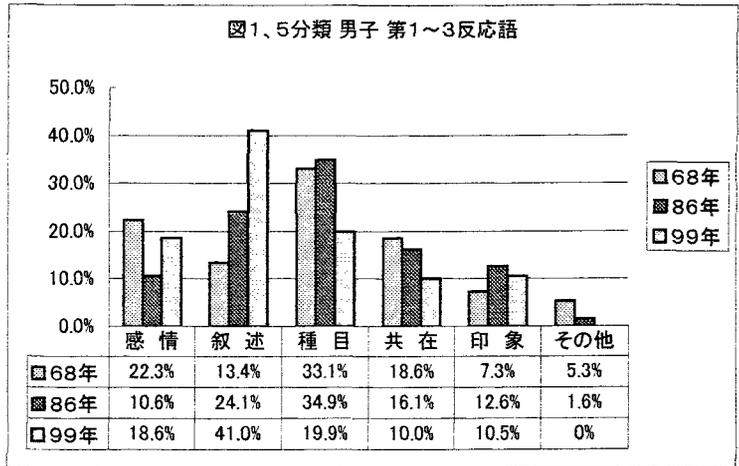


図2、5分類 女子 第1~3反応語

